

閲覧ニュース

27号

1980. 7

☆ 前期試験に備えて

1) 開館時間について

平日；9時から6時

土曜日；9時から1時

但し、6/28(土)、7/5(土)、7/12(土)は、
3時まで開館

2) 一部図書貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中します。このため、予約の多いものに限り、オーバーナイト貸出、三日貸出等の措置をとります。

3) 複写について(平常どおりです)

午前中受付(12時30分まで)昼1時以降渡し

午後受付(4時まで)4時30分以降渡し

※午後4時以降の受付は翌日扱いとなります。

なお、図書資料に限ります。

夏休み中のお知らせ

夏休み中の開館、貸出等につきましては下記のとおりです。

1) 夏季長期貸出

* 貸出期間 7/17(木)～9/18(木)

* 貸出冊数 1人5冊

2) 夏休み中の開館時間

* 平日 9時から5時(但し8月中
は10時から3時)

* 土曜 9時から1時(但し8月中
は10時から1時)

なお、8/11(月)～8/16(土)は、閉館となります。



❁ 図書館近況(1980. 4月～6月)

▶今年の4月より新しく館長、小野健一先生と司書、水口美穂さんを迎えて、教養図書館も開設13年目の新たな頁を開くことになりました。この間、蔵書数は1万冊から5万冊に、職員も5名から6名に、また利用者も増え続け、それに伴ない利用の多様化が目立ちます。4頁に現有蔵書数と貸出比率の統計を載せましたのでご覧下さい。

▶運営委員になられた諸先生方にも期待するものは大です。小野館長をはじめと

として、神達、正田、津末、山根、伊藤、前田の諸先生方、どうぞよろしくお願い致します。

▶うれしいニュースをひとつ紹介します。小野館長が去る5月29日、第三回マルコポーロ賞を受賞されました。レオナルド・ダ・ヴィンチの『鳥の飛翔に関する手稿』のイタリア語原文から優れた翻訳(1980. 岩波書店刊)に対して「イタリア語学賞」という荣誉ある受賞です。

遠藤周作の『侍』を読む

伊 藤 幸 子 (英語)

14年前、いわゆる“^{ころ}転びパテレン”の苦悩を描いた『沈黙』によって話題を喚んだ(“沈黙”がおしゃべりを喚ぶなんて面白いですね)遠藤周作氏が、最近、同じく迫害された切支丹の問題を扱った小説『侍』を出しました。これは、1613年伊達政宗の命を受けて、メキシコ、スペイン、ローマに渡った遣欧使節^{はせくしつねが}支倉常長をモデルにしているのですが、この人の伝記として書かれたものではなく、江戸時代の初期に東北の山深い谷戸に生まれ、その狭い世界から、政治の渦に巻き込まれて、思いもかけずヨーロッパという広大な未知の世界に連れ出され、およそ異質の文化に突き当たって驚愕と困惑とを味わい、そして結局そのために悲劇的最期を遂げるに至った一人の武士の生涯を、作者の内部で再構成することによって、作者が一貫して追求して来た日本人とキリスト教というテーマを、さらに発展、深化させたものなのです。

この小説では、主人公の長谷倉六右衛門(支倉常長)は常にもの静かで控え目な、自分の考えをはっきり表に出すことをしない、ただただ運命に従順な(封建時代のことですから、この特質は主君に盲目的に忠実であるという形で表われます)一人の下級武士として描かれ、むしろ彼の相手役の 에스パニヤ(スペイン)人の神父ベラスコの方が、野心満々たる宣教師として華々しく活躍します。徳川幕府の政策により、江戸はもとより日本全国において次第に切支丹弾圧が厳しくなっていく中で、日本人の現世的利益に^さ敏感な性格を熟知しているベラスコは、持って生まれた政治的才能をフルに生かして為政者と掛け合い、幕府がノベスパニヤ(メキシコ)との通商を切望していると知るや、抜け目なく

その仲介役を引き受け、それと引き代えに布教の自由を手に入れようとしています。かくして彼は、伊達政宗がノベスパニヤに送り出した使節に、通辞(通訳)として同行することになります。彼は首尾よくこの役目を果せば、その功績によって、自分の属する 에스パニヤ本国のボーロ会から司教に任命され、日本における布教の権限を一手に握ることができると、目算を立てていたのです。しかし、徳川幕府の政略は、南蛮^{バードル}人の一神父に翻弄されるほど底の浅いものではありませんでした。ベラスコと使節達^{バードル}が乗り込んだ船は、嵐のため漂着して破損した 에스パニヤ人使節の船を仙台藩で造り直した、ガレオン船という大船でしたが、この船には使節達の他、エスパニヤ人の乗組員に加えてあまたの日本人の商人や水手^{かこ}が乗り込ませてありました。商人はノベスパニヤから羊毛やラシャを仕入れるためであり、水手達は太平洋を渡る航路と、ガレオン船の航海技術を盗むために乗せてあったのですが、実はこちらが幕府の狙いであって、通商を開くための使節というのはほんの名ばかり、貿易の許可と引き代えにキリスト教の布教を許す気など全く持っていなかったのです。要するにこの長谷倉達は敵の目をあざむくための^{てい}体のよい^{おとり}餌にすぎなかったのです。彼等の留守中に幕府が全国的な切支丹禁制に踏み切ったとも知らず、使節とベラスコは、交渉が旨く捗らないまゝにノベスパニヤから 에스パニヤ本国へ赴き、さらにはカトリック総本山のローマにまで乗り込んで法王に謁見しますが、結局交渉は不首尾に終り、ベラスコは帰途ルソンに残り、長谷倉ともう一人の使節は7年という年月を経て、ようやく故郷の月の浦の港に帰り着きます。しか

し彼等を待ち受けていたのは苛酷な運命でした。彼等は交渉を成立させようとするベラスコの計略から、エスパニヤで洗礼を受けていたのですが、そのために帰国後日ならずしてお仕置になってしまうのです。一方ベラスコは、日本での布教に対する執念やみ難く、密かにまた日本へ渡って来ますが、上陸直前に捕えられて、これも、九州のある海浜で火あぶりの刑に処せられます。

ところで、この悲劇の使節長谷倉六右衛門が、7年にわたる異国遍歴で最も強い印象を受けたものは、どこの宿舎でも必ず出合う十字架上のキリスト像でした。彼は、両腕をひろげて力なく^{うなだ}首垂れているこの瘦せこけたみすばらしい男を何故人々がかくも崇^{うや}まうのか、また、こんな衰れっぽい弱々しい男のために、何故ベラスコほどの才覚のある男が、艱難辛苦をものともせず万里の波濤を越えて日本などへやって来るのか、どうしても理解することができませんでした。彼はマドリッドで他の使節と一緒に洗礼を受けはしましたが、これは自分の役目を果たために止むを得ずやったことで、決して本心からカトリック教に帰依したわけではありませんでした。しかし彼は日本へ帰って来て、自分達の旅が全く無益なものであったことを知り、自分が政治という巨大な怪物の爪にかけられた、無力なねずみのような存在であることを思い知らされた時、異国の荒涼とした土地でめぐり合ったあの放浪者にも似たみすばらしい男が、いつの間にかこの上なく身近な懐しい面影となって、心にしのび込んでいることに気が付いたのです。彼は従者としてあの長旅の苦勞を共にした下男の手蔵にこう言います。

俺は形ばかりで切支丹になったと思うてきた。今でもその気持は変らぬ。だが御政道の何かを知ってから、時折、あの男のことを考える。なぜ、あの国々ではどの家にもあの男のあわれな像が置かれているのか、

わかった気さえする。人間の心のどこかには、生涯、共にいてくれるもの、裏切らぬもの、離れぬものを——たとえ、それが病みほうけた犬でもいい——求める願いがあ
るのだな。あの男は人間にとってそのようなあわれな犬になってくれたのだ。

この、悩める者や孤独な者と共にいてくれる“同伴者”としてのイエス・キリスト、愛のみを行い、しかもそれ故に現実においては決定的に無力で、みじめで、人々に蔑まれる存在であるようなイエスこそ、カトリック教徒としての遠藤氏が、終始一貫求め続けて来たものなのです。自分にとってのイエスとは一体何なのかという、いわばイエスの正体をつぎとめるための模索を記した『イエスの生涯』や『死海のほとり』を読めば、彼の心に描くイエスは、常に自分の傍にいて、母親のような愛をもって慰めてくれる同伴者であることがわかります。遠藤氏のこのようなイエスは、ともすると、彼の個人的感情を投影し過ぎるために、歎きや哀しみに溺れ込んだような、いささかウェットな人物になり勝ちなのですが、今度の『侍』においては、個人的感情は表に出さず、つとめて客観的に書いているので、みじめな者の同伴者としてのイエスの姿にも、砂漠の夕風のような乾いた悲哀が漂って、仲々どうして悪くありません。しかもこのような乾いた悲哀の方が、恐らくキリスト教本来の境地に一層近いのです。イエスが人間の罪と苦悩を我が身に引き受けて、時にはその重みに耐え兼ねつゝ、よろめく足どりで歩んだ岩山や荒野を吹く風は、人間の生暖い感情や
はかない希望を吹き飛ばしてしまうほど厳しいものを、その一面において持っているからです。この小説の最後に、ベラスコが焔に包まれて雄雄しく殉教した後、処刑場の番人がその骨と灰を集めて菰に入れ、石を詰めて海に捨てると、

波がそれを呑み込み、やがて“何事もなかったように”冬の陽のもとで海がひろがっています。侍が運命に弄ばれて、何とも馬鹿々々しく空しい死を死なねばならなかったのも、ベラスコが野心を挫かれ、それでも尚、殺されることを承知で日本へ密航して来るのも、恐らくどうにもならぬ人間の宿業のなせるわざでしょうが、そのような彼等の姿を、自然は全く無関心に、常に変らぬ清朗さを湛えて見ているだけです。こ

れが神の“沈黙”なのであり、この世界の不条理性なのです。この不条理性の正しい認識こそあらゆる宗教の根幹であります、ここに至るまでの道程は誰にとっても決して生やさしいものではありません。この『侍』という小説において、冷静に、しかもみごとにこの現実を描き切った作者に、私は声を大にして「周作さん、でかしたぞ!」と言って上げたい気がします。

1980年6月29日

新 書 案 内

(1979. 12月～1980. 6月分)

<中公新書>

「美の幾何学—天のたくらみ、人のたくみ—」

伏見康治他著 中公新書554

「くるまは弱者のもの—ツボグルマの提唱—」

上田篤著 中公新書556

「対象喪失—悲しむということ—」

小此木啓吾著 中公新書557

「いろはうた—日本語史へのいざない—」

小松英雄著 中公新書558

「康熙帝の手紙」岡田英弘著 中公新書559

「明治六年政変」毛利敏彦著 中公新書561

「建築旅愁」長谷川堯著 中公新書562

「幼い子の文学」瀬田貞二著 中公新書563

「パナマ運河—その水に影を映した人びと—」

山口廣次著 中公新書564

「死刑囚の記録」加賀乙彦著 中公新書565

「巡礼の道—西南ヨーロッパの歴史景観—」

渡辺昌美著 中公新書566

「江戸の本屋(上)(下)」鈴木敏夫著

中公新書568

中公新書571

「虫を放して虫を滅ぼす—沖縄・ウリミバエ

根絶作戦私記」伊藤嘉昭著 中公新書570

「イスラームの心」黒田壽郎著 中公新書572

「結び目の謎」額田巖著 中公新書573

「企画の技法」加藤秀俊著 中公新書574

「時間のパラドックス—哲学と科学の間—」

中村秀吉著 中公新書575

「海のラクダ—木造帆船ダウ同乗記—」

門田修著 中公新書576

<岩波新書>

「物理学とは何だろうか 下」

朝永振一郎著 岩波新書 86

「トランプものがたり」

松田道弘著 岩波新書102

「神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈—」

安丸良夫著 岩波新書103

「分子と宇宙 — 幾何学的自然観 —」
 木原太郎著 岩波新書 104

「西ドイツの社会民主主義」
 仲井斌著 岩波新書 105

「七つの国の労働運動 上・下」 岩波新書 106

G. Martinet 著 熊田享訳 岩波新書 107

「イギリスとアジア — 近代史の原画 —」
 加藤祐三著 岩波新書 108

「歴史の転換のなかで — 21世紀へ —」
 小田実著 岩波新書 109

「労働現場 — 造船所で何が起ったか —」
 鎌田慧著 岩波新書 110

「公害摘発最前線」 田尻宗昭著 岩波新書 111

「生命を探る 第2版」
 江上不二夫著 岩波新書 112

「折々のうた」 大岡信著 岩波新書 113

「明治大正の民衆娯楽」
 倉田喜弘著 岩波新書 114

「動力物語」 富塚清著 岩波新書 115

「メキシコからの手紙 — インディヘナのなか
 で考えたこと —」
 黒沼ユリ子著 岩波新書 116

「寺社勢力 — もう一つの中の中世社会 —」
 黒田俊雄著 岩波新書 117

「J・S・ミルと現代」
 杉原四郎著 岩波新書 118

「イスラーム哲学の原像」
 井筒俊彦著 岩波新書 119

「モンテニユ — 「エッセー」の魅力 —」
 原二郎著 岩波新書 120

「筋肉のなぞ」 丸山工作著 岩波新書 121

<講談社現代新書>

「蓮如」 森龍吉著 現代新書 550

「「考え方」の風土」
 桜井邦朋著 現代新書 551

「志士たちの詩」 嶋岡晨著 現代新書 552

「創造の方法学」 高根正昭著 現代新書 553

「ピラミッドの謎」 吉村作治著 現代新書 554

「シルクロードの終着駅 — 正倉院への道 —」
 長沢和俊著 現代新書 555

「知の周辺」 水田洋著 現代新書 556

「自然観察の方法」 金井郁夫著 現代新書 557

「ユニークな日本人」
 G. クラーク, 竹村健一 共著 現代新書 560

「文章表現の技術」 植垣節也著 現代新書 561

「レムリア大陸の謎」 A. M. Kondratov 著
 中山一郎訳 現代新書 562

「女性学ことはじめ」
 岩男寿美子, 原ひろ子 共著 現代新書 563

「石仏 — 庶民信仰のこころ —」
 清水俊明著 現代新書 564

「大正文化」 竹村民郎著 現代新書 565

「創造と狂気」 徳田良仁著 現代新書 567

「「知恵」の再発見」
 中山正和著 現代新書 569

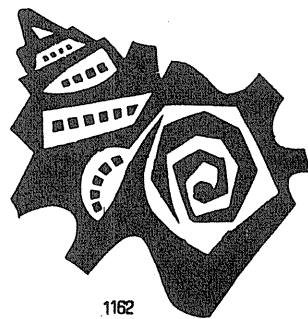
「光太郎と朔太郎」 岡庭昇著 現代新書 570

「近代日本の宗教」 村上重良著 現代新書 571

「アメリカ人と日本人」
 尾崎茂雄著 現代新書 573

「経済学に何ができるか」
 伊賀隆著 現代新書 574

「詩のこころ・美のかたち」
 杉山平一著 現代新書 575



1162

◆教養図書館現有蔵書数と昭和54年度貸出数(昭和55年3月31日現在)

	主 題	N D C	蔵書数	比率(%)	貸出数	比率(%)
人文・社会科学	総 記	000	2,420冊	5%	91冊	1%
	哲 学	100	3,849	8	464	4
	歴 史	200	4,629	9	299	2
	社会科学	300	7,649	15	699	5
自然科学	自然科学	400	14,650	29	7,276	59
	工学・工業	500	1,549	3	321	3
	産 業	600	846	2	60	1
芸術・体育	芸 術	700	1,556	3	160	1
	体育・スポーツ	780	793	2	153	1
語学・文学	語 学	800	2,702	5	230	2
	文 学	900	8,867	18	2,489	20
	未 分 類	新 書 特別図書	598	1	198	1
	合 計		50,108冊	100%	12,440冊	100%

～ 提案箱から ～

<提案1>

土曜日の午後は、おちついて自習をしたいと望む学生がたくさんいると思います。そんな時に、大学の図書室はまさにぴったりの場所です。土曜日午後3時ごろまで図書室を開けてください。

<提案2>

土曜日の午後でも図書室を開館して下さい。クラブが4時ごろからなのでそれまで図書室で勉強したいです。そういう人は多いと思います。ぜひ、午後もせめて3時ごろまではあけて下さい。お願いします。勉強したいと思っている学生の声を無視しないで下さい。

現在、土曜日の開館は平常9時～午後1時ですが、試験期は3時まで延長しております。

さて、土曜日の9時～1時開館ですが、これは①職員の勤務時間、②教養部講義のカリキュラム(土曜日は12時10分にて終了)に沿ったものです。しかし、開館延長の要望は過去にもあり、それについては再々検討し、それなりに努力して参りました。その結果として平日の一時間延長が実りましたが、ご承知のとおり、教養図書館は本来、教養部の学生のための学習図書館として開設されましたので予算も人員も限られた制約の中での運営です。司書の勤務体制、労働条件等が変わらない限り、現在の開館時間を変えることは非常に難しいということです。しかし、今後、引き続き検討して皆さんの要望にこたえるよう努力いたします。

✿ 提案文へのお答え

教養図書館の実状とそれに対する図書館としての考え方をお知らせ致します。

✿ 提案者へのお願い

匿名で結構ですが、差し障えなかったら学部(又は学科)学年を記入してください。

閲覧ニュース27号
北里大学教養図書館

1980. 7 発行

発行責任者 小 野 健 一